

# ソウル都市型韓屋の都市的適応性及び空間の使い方・改造の経時的変化と可能性に関する研究

—西村地区の韓屋と路地の実測調査を通じて—

建築デザイン

米田沙知子

## Abstract

この研究では、景福宮の西に位置する西村地区の韓屋や路地の実測を行うことで、ソウルの都市型住居である都市韓屋についての配置や現在の変化に関する研究を行ったものである。ソウルは元々自然の形を利用してできた城郭都市であり、敷地や路地もこの自然に沿って、自生的につくられた。そのため、不定形の路地や敷地が多い。そんな中、都市韓屋は人口集中と共にソウルの中に密集して建てられた。ここでは、このような不定形の土地に、都市韓屋はどのような規則をもって配置されていったのかを研究したものである。この研究では、西村地区の30個の韓屋を実測することで、内棟の関係性の重要性、そして門間の都市型適応性を明らかにした。そして更に、これら韓屋の現在の変化をみることによって、韓屋の今後の可能性について述べた。

## 1. 研究の目的と方法

それぞれの国の都市には、人々が集まって住むための住居である都市住居が存在する。韓国には都市住居として都心の人口集中に伴い、1930年から60年代にかけて大量生産された都市韓屋がある。この都市韓屋は、小さな土地にも建てられるように発展したもので、主にㄷ字型、ㄱ字型、ロ字型<sup>1</sup>の字の形をしている中庭式住居である。1960年代の航空写真を見ると、当時のソウルの住居はほとんどが都市韓屋で、細胞のように密集しているのが分かる。これらの都市は一体どのような都市メカニズムをもって、発展していったのだろうか？

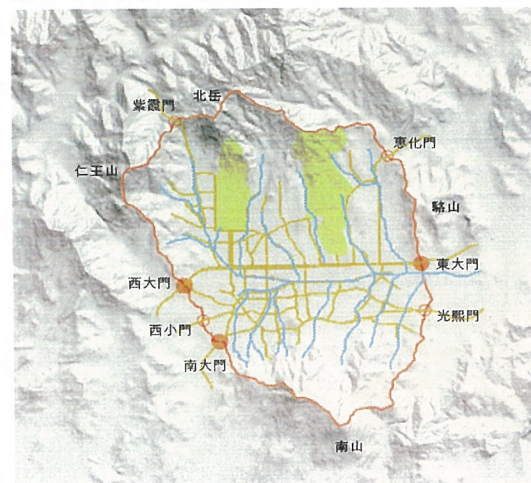
しかし、これら都市韓屋は現在再開発によって、どんどん壊されていっている。こんな中、一度再開発地域に指定されながら、韓屋の保存地域となり、地区単位計画が適応した地区がある。西村地区<sup>2</sup>である。この地区は、景福宮の西側に位置しており、朝鮮時代からある路地が残っており、現在現存している一番古い都市構造をもつうちの一つだといわれている。そして観光地化された北村と違い、庶民の町の風景がそのまま残っている場所でもある。

本研究では、西村地区の調査を中心に、資料が比較的近代以降の路地や敷地の発展を時代ごとに分析した上で、それら路地に対して、都市韓屋がどのように配置されたのかを都市韓屋の空間構成の関係性を通して明らかにすることを目的とする。<sup>3</sup>さらにここでは、現在大規模な再開発により、失われてきている都市韓屋の現代の動向と、都市韓屋の可能性について述べる。<sup>4</sup>

## 2. ソウルの都市形態と西村地区の変遷

### ■ソウルの都市形態

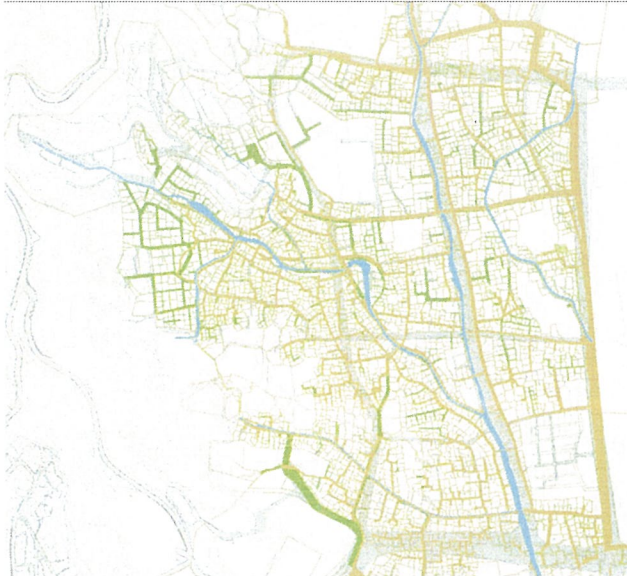
ソウルの前身である漢陽は風水によって定められ、四方を山によって囲まれている山城都市<sup>5</sup>である。四つの山（北岳-仁王-南山-駱山）を利用して外と内が区別され、その尾根にそって城壁がつくられ、山と山の間に外に通じる城門が造られた。山の地形は、北、西、南が険しく、東が比較的穏やかなので、水は西から東に流れ、平坦な土地が東西に広がっていた。よって、都市は東西に広がり、西大門と東大門をつなぐ鐘路を中心に広がった。一方、北岳を背に王宮である景福宮が作られ、漢陽の都市がつくられていった。また、囲まれている四方の山から流れてきた川を中心に町が形成され、自生的に都市がつくられており、現在の都市もこの自然条件の元に作られた都市の先行形態が多く残っている。<sup>6</sup>（図1）



1 ソウルの都市組織図

（イ・サング作成した図に筆者が名前を付け加えたもの）

ここで、朝鮮時代以降の都市形態の変遷を見るために、対象地域である西村地区を中心に、1912年—1936年—1960年—2002年<sup>7</sup>の敷地と路地形態の地図をつくり、比較した。(図2)



2 1912年(茶、川—青)—1936年～1960年(緑)—現在(灰色)の地籍と路地を重ね合わせたもの(作成 guga 都市建築)

### ■朝鮮時代の西村地区(1912年以前)

調査対象地域である西村は王宮である景福宮のすぐ西側に位置しており、王宮に関連している施設が多くあった場所である。また、西側にある仁王山は朝鮮時代から景勝の地で有名で、よく貴族や王などが詩会などを開いた場所でもある。一方西村地区の南側は庶民たちが住んでおり、今でも残るくねくねとした路地は朝鮮時代からあったことが分かっている。<sup>8</sup>1912年の地点でも王宮の関連施設があったところは、大きな土地が残っていた。また、南側は複雑な路地形態を持っていた。

### ■日帝時代の西村地区(1912年以降—1960年代)

しかし、日本の植民地支配になり、王の力がなくなった上、都市への人口集中に伴う住居不足のため、大きな土地たちは分割されていった。大きな土地は様々な形で分割された。一部は日本人の社宅として一気に開発されたり<sup>9</sup>、また、親日派といわれる貴族たちの邸宅として使われた。<sup>10</sup>そして、細かく割って都市韓屋や日本式住居を計画したものもある。このようにして、以前あった形を使用しつつ、変化してきた。

### ■光復・朝鮮戦争後の西村地区(1960年代以降)

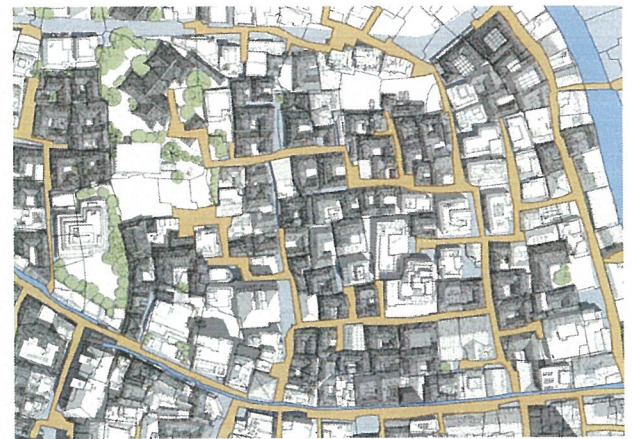
近代化の遅れを取り戻すかのようにソウルは戦争後、開発され急成長を遂げるが、西村地域は青瓦台<sup>11</sup>の近くにあったため開発に遅れをとった。しかし、防災のために防火道路がつくられ、今までの都市組織が大きく変化した。今まで自然条件で区切られた洞たちは、道路によって格子型のブロックのように分割され、車が通れるようになった。しかし、新しくつくられた道

路以外の部分は未だ昔の都市形態を残していた。2000年ソウル市によってこの地域も再開発対象地域として指定されたが、2008年再びソウル市によって、韓屋保存地域として指定され、地区単位計画がたてられた。

このようにして、西村地区は変化してきたが、基本的に自然条件によってできた町並は比較的残っており、大きな土地が分割されて一気に開発された韓屋と、自生的にできた土地にたてられた韓屋の両方を観察することができる地区であることがわかった。

### 3. 西村地区における路地の実測と分析

ここで、自生的にできた土地が分割されながらできた路地と韓屋、そして大きな土地が一気に開発されてたてられた路地と韓屋の違いをみるために、路地の実測調査を行った。本文では10個の路地についての実測を行ったが、ここでは代表的な例を一つずつだして比較する。

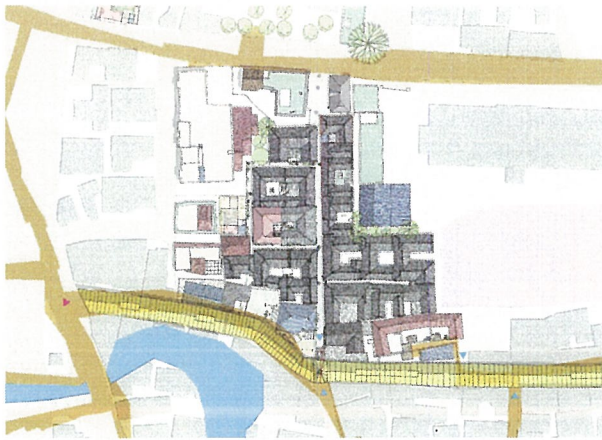


3 體府洞 165-1 番地一帯の路地の様子(茶—1912年の路地、青—1912年の川)

自然発生的にできた路地は、川や川に沿った道から路地が発生しており、北西に向かってくねくねと伸びている路地が多い。また、その路地からさらに、枝状に伸び、行き止まりになっている。また、行き止まりには大きな土地が多いことも分かる。これらは川などの自然発生した道から枝のように道ができ、そこに家をつくり、また、違う人がそこからまた道を伸ばし、その突当りに家を建てるその繰り返しが行われ、経時的に路地が作られているからである。よって、路地は一直線にはならず、川に沿って作られるか、そこから伸びながら路地が形成されていっている。また、この路地たちは地形にも大きく影響をうけており、少し丘になっている部分は行き止まりになっていて大きな土地が多い。敷地も不定形な形が多く、それが分割されているため、敷地も不定形が多い。

反対に計画された敷地は一気に開発されるため、直線の路地が多い。また、敷地はほとんど四角形に分割されている。しかし、一気に開発されても周りの路地との関係や元々の土地の先行形態があるため、似たようなL字型の都市韓屋が並びつつも、全く同じではなく、その場所に対応してたてられていることが分かっ

た。これは、一気に土地は開発しながらも、韓屋は違う会社が建てたため、違いが生じた可能性もあるが、その要因よりは、土地の形や路地との接続方向の差にあったと考えられる。



4 通仁市場の北にある韓屋群の実測図

このように大きな土地が一気に開発されても、徐々に開発されても、敷地の先行形態が土地の形や韓屋の形に大きく影響を及ぼしていることが分かった。

敷地の先行形態は、自然の秩序の元、作られたソウルの中では場所によって形が異なるため、その土地ごとに対応して建てられなければならない。では、一体どうやってこの不定形な土地に都市韓屋は密度高く配置されていったのだろうか。

#### 4. 西村地区における都市韓屋の実測と分析

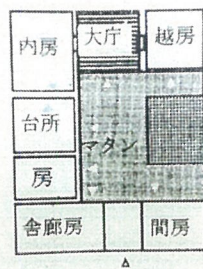
そこで、ここでは、西村地区における30個の都市韓屋の実測を行い、敷地に対してどのように配置されているかを分析した。ここでは、計画された土地に建てられた韓屋と、自生的にできた土地に建てられた韓屋をまんべんなく合わせて実測した。

実測した韓屋についてまとめたのが次の表である。

(図6) ここで、表記している「形」というのは、韓屋の棟の形の構成のことで、A=アンチェ(内棟) B=ビョルチェ(別棟) S=サランチェ(舎廊棟) M=ムンカンチェ(門間棟) 1M=1間のムンカン m=大門と表記し、それぞれの形を示している。例えば今まで典型的な都市韓屋として提示されてきた十字型の韓屋<sup>12</sup>は、全体の形が十字で、それぞれ、十字型の内棟、一字型の門間があるので、 $\square(\neg(A)+\neg(M))$ と表記した。

ここで注目すべきことは、今まで典型的な都市韓屋として提示されてきた十字型の韓屋は、30個のうち、14個であり、半分にも満たない。また、ほとんどの十字型の韓屋は、四角形の敷地に建てられていることもわかる。また、

この表をみると、内棟は南東を向いているものが多いものの違う向きものもあり、大門の向きも



5 典型的な都市韓屋の形としてよく提示される十字型の都市韓屋の形

家によってバラバラである。

では、これらは、どのようなシステムを持って配置されているのであろうか？

まず、これら実測した韓屋の配置をみると、敷地や路地の方向に関わらず変化しないものと変化するものとに分かれる。

番号	住所	形	竣工年	敷地の形	建坪率(%)	大門の向き	大門の向き	マダンの向き	階段の有無	用途	改造
1	樓下洞33	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1934	四角	55.49	南東	北東	南東	無	店+住居 倉庫	門間棟+店舗
2	樓下洞144-1	$\square(A)+\neg(S)+1M$	1934	不定形	32.93	北	東	北東	無	教会+住居	室内化マダン
3	樓下洞144-3	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1935	四角	42.75	東	南	南東	無	住宅	
4	樓下洞172	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1935	四角	50.12	東	南	南東	無	住宅	
5	樓下洞104	$\neg(A)+m$	1935	不定形	51.84	南東	南東	南東	無	住宅	マダンに増築
6	昌成洞109-8	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1935	四角	54.57	南	東	南東	無	事務所	空間の一体化
7	昌成洞98-17	$\square(A)+m$	1937	不定形	47.43	東	北東	北東	無	レストラン	空間の一体化
8	樓下洞155-1	$\square(A)+1M+\neg(B)$	1937	三角	33.87	東	北	北東	有	住宅+倉庫	
9	樓下洞155-6	$\neg(A)+1M+\neg(B)$	1937	不定形	46.92	南	北	南東	有	住宅	室内化マダン
10	通義洞7-14	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1938	四角	64.72	南	西	南西	無	ギャラリー	空間の一体化
11	孝子洞164-2	$\neg(A)+\neg(S)+m$	1940	不定形	34.59	南	西	南東	無	記念館	
12	樓下洞176	$\square(A)+1M+\neg(B)$	1942	不定形	45.11	南	北	南東	無	作業室	
13	禮府洞166-1	$\neg(A)+1M+\neg(B)$	1953	不定形	51.8	南	北	南東	無	住宅+倉庫	マダンに増築
14	樓下洞10-6	$\square(\neg(A)+M)$	1955	不定形	69.8	南	西	南西	無	住宅	
15	樓下洞98	$\neg(A)+\neg(M)$	1956	不定形	44.28	南	東	南東	無	住宅	チャンドクテ 室内化 室内化マダン 書+マダン
16	樓下洞133	$\neg(A)+m$	1956	不定形	51.04	東	東	南東	無	住宅+米屋	
17	通義洞7-34	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1956	四角	58.97	南	南	南東	無	慶屋	
18	王仁洞16-2	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1959	四角	53.21	南	南	南東	有	住宅	
19	禮府洞164-1	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1959	四角	56.83	南	東	南東	無	住宅	大庁+越房+一体化 内房+台所の道
20	禮府洞147-1	$\neg(A)+\neg(M)$	1959	不定形	51.04	南	東	南東	無	住宅 (不仕用)	
21	樓下洞226	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1959	四角	66.13	南	東	南東	無	住宅	内房+台所の通行
22	王仁洞2-13	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1960	四角	59.43	南	東	南東	有	住宅	内房+台所の通行
23	王仁洞2-12	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1964	四角	53.34	南	東	南東	有	研究室	空間の一体化
24	王仁洞34-1	$\neg(A)+\neg(M)$	1961	不定形	49.37	南	南	南東	有	倉庫	アトリウムマダン
25	通仁洞1-9	$\square(A)+1M+\neg(B)$	1961	四角	54.71	南	西	南東	無	住宅	室内化マダン
26	禮府洞153-8	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1961	四角	56.16	南	東	南東	有	住宅	マダンに廊下増 設
27	禮府洞153-1	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1961	四角	51.1	南	東	南東	有	住宅	
28	樓下洞7-3	$\neg(A)+\neg(M)$	1961	不定形	45.21	南	東	南東	有	住宅	室内化マダン
29	王仁洞19-16E	$\square(\neg(A)+\neg(M))+m$	1963	不定形	33.29	南	東	南東	無	慶屋	
30	慎善洞25	$\square(\neg(A)+\neg(M))$	1968	四角	42.17	南	西	南西	無	ゲストハウス	アトリウムマダン

6 実測した30個の都市韓屋についての表

まず都市韓屋の配置において、敷地などに影響をうけず変化しないものひとつとして、<sup>アンチェ</sup>内棟の形と配置の関係性があげられる。

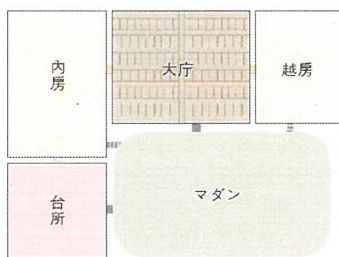
内棟の配置の関係性とは、<sup>ブオク アンパン テジョン</sup>十字型[台所—内房—大庁—<sup>コンソパン</sup>越房、マダン]の関係性である。この関係性は、台所—内房の関係性と内房—大庁—越房の関係性が、内房を中心にして重なりあったと思われる。また、マダン—台所、マダン—大庁の関係性も重なり合い、現在の内棟の十字型の構造ができたと思われる。<sup>13</sup>

<sup>オンドル</sup>台所—内房は温突との関係が強く、住宅内での重要な位置を占める内房を暖めるために台所であると同時に温突の焚口である台所は、内房に接して設けられた。また、マダンには料理に使うものたちが置かれるチャンドクテがあり、また、マダンはキムチをつくったり、唐辛子を干したりなどの家事を多く行う場所でもあるため、台所とマダンは常に深い関係性がある。

また、内房—大庁—越房の関係性においては、越房は内房の次に重要な家族が寝る寝室であり、ここも温突となっている。内房と越房の間には板の間になっている大庁があり、通風がよく夏の季節に対応した空間になっている。温突の部屋とは違い、構造がむき出しになっており、ここにある大梁は家の大きさや位を

示す重要な場所でもある。都市韓屋では、ここにガラス戸がはめられ、舎廊棟の代わりに接客空間として、またリビングとして使用されており、家の中でも太陽が一番多くあたる場所に普通配置されている。土地の形や敷地の場所によって違うが大体は南、南が無理だと東側に向いて配置される。この大庁は 内房と越房へ入る通路の役割もしており、マダンとの関わりが深い。

これら関係性が重なり合い、揺るぎない「台所—内房—大庁—越房、マダン」の関係性ができた。また、この関係性は、密集化する都心には有効な形であったと思われる。なぜなら、台所—内房—大庁—越房の関係性を確保しながらも、重要であるマダンの空間を確保できるからである。隣と境界を別に作る必要なく、内棟が空間の提供と同時に隣との境界となる閉鎖的構造をもち、最小限の敷地の大きさで



もマダンが確保できるのが特徴的である。(図7)

7 「台所—内房—大庁—越房、マダン」の関係性の図

### ■門間の役割

これらの関係性に対して、反対に敷地の大きさや、形に

より多様に変化しているものがある。それは、門間である。以下の図は、路地と敷地内に配置された内棟、門間、そして別棟、チャンドクテを色別にかけて示した図である。(図8)

門間は、敷地に配置された内棟に対して様々な形で対応しているのが分かる。

以下様々な形と役割をする門間について説明する。

#### 内棟にくっついた1間門間

例えば、9、12、13 番の韓屋は、敷地の形や、内棟の方向性を重視に南向きに大庁がくるように配置されたが、路地が北側に接しているため、内棟の先に1間だけの門間を設けることによって、敷地いっばいに南向きのマダンを囲んで内棟をとることができ、道路との入り口を作っている。また、マダンの南側に別棟を設けることによって、空間の不足を補っている。一方、25 番は、南北に長細い敷地のため、東西両側に棟を配置することができず、内棟を道路側に配置し、内棟の先に1間の門間を配置することで解決している。ここでも空間の不足を補うために南側に別棟を配置している。また、8 番も、道路と接する面積が小さいため、内棟の先に門間をつけることで、解決している。

#### 内棟の越房の下にくっついた門間

一方、14、15、28 番は、南向きの大庁をもった内棟を配置するには、敷地の東西の長さが足りないため、越房を道路に面するまでいっばいに内棟を配置し



8 実測した30個の都市韓屋たち(黄-内棟、茶-大庁、ピンク-門間、橙-別棟、青-チャンドクテ)

た後、路地との接点である門間を配置している。15、28番では、内棟と門間棟の構造は別々にたてられているが、14番は内棟と門間棟の構造を合体して、一つのロ字型になっているのが興味深い。

#### 内棟の方向と道路の方向の矛盾を解決する門間

また、3、20、24番は、敷地の方向と路地の方向性が違うが、門間棟が道路に対して形を変形させることによって、道路と敷地の方向性の矛盾を解消している。

#### 二重門とサランマダン

また、道路と敷地の矛盾の解消の方法として、二重に門を設けて、門と門の間の空間をサランマダンとする場合も見られる。2、29番である。これらは、門間棟が十分にたてられない路地に面する部分には門だけを設け、敷地のいびつな部分をサランマダンとし、十分な大きさの敷地を確保した上で、門間棟を設けている。また、サランマダンを設けている例としては11番も当てはまり、内棟と舎廊棟の間を狭めることで二重門の役割をしている。

#### 敷地の狭さを解消する大門

一方、敷地がとても小さいと、門だけを設けている場合もある。5、7、16番は、敷地が小さいため、内棟だけを設けて、道路との境界には大門と塀を巡らすことで、敷地の狭さを解消している。門間棟を建てるとマダンの大きさが狭くなってしまふからである。

#### 空間の提供と防犯の役割をする一字型門間

典型的な都市韓屋と言われるロ字型の韓屋には門間棟が道路に面して一直線に門間棟が一直線にたてられている。ここは、内棟に不足な部屋や倉庫、トイレなどの空間を提供したり、道に面しているために商業店舗として使用されることも多い。家族が多いと、家族の部屋や生活に必要な空間（倉庫やトイレ）として使用したり（3、4、18、19、21、22、23、26、27番など）部屋が余っている場合、貸家にすることも多い。（29番）また、1番は、門間棟を店舗として使用し、一部は賃貸している。そして、二階建韓屋がまさに門間棟が商業化した例だと言える。二階建て韓屋は主に店舗として使用され、後ろの内棟に家族が住んでいる場合が多い。

#### 段差の解消をする門間

また、高低差のある場所に家がたてられた場合、門間に階段を設けて段差の解消を行う。特に8、9番は、路地の行き止まりで更に高い位置にたてられた韓屋であり、この門間は、北向きの路地と不定形な敷地に対応しながら、門間に階段を設けることで、段差の解消まで行っている。そのおかげで、韓屋は不定形で高い位置にある敷地にすっぽりと収まるように配置されているのである。

#### ■門間の都市的適応性

このように門間にはさまざまな役割があることが分かった。

まとめてみると

1. 入り口／境界
2. 路地と内棟の関係を結ぶ
3. 敷地の狭さに対応
4. 道路の方向と敷地の形の矛盾の解消
5. 防犯性
6. 二重門によるサランマダンの生成
7. 内棟から独立した空間の提供
8. 敷地と道路の間の段差の解消

など多様な役割があることが分かる。この門間の都市に対する適応性のおかげで、計画された敷地以外にも、不定形な敷地、小さな敷地、段差のある敷地、不利な路地への接道など、不利な条件にも関わらず、それぞれの敷地条件に合わせて多様に適応し、基本形態であるロ字型の内棟を配置しながら都市の中にたてられていったのではないかと思われる。

また、ロ字型の内棟の空間を確保することで、マダンが必ず確保されるため、家と家は密集しつつも、韓屋の敷地内は、息苦しくなく、自分達だけの外部空間を確保できたのだと思われる。

#### 5. 現在の都市韓屋の変化と可能性

ここでは、前で述べたように都市の形に適応しながら密集してたてられた都市韓屋が現在どのような使われ方をし、どのように変化してきたのかを述べる。

#### ■空間の一体化

前で述べたように、ロ字型[台所—内房—大庁—越房、マダン]の関係性は、都市韓屋がたてられた時代はとても重要な要素であった。しかし、温水暖房式に変った現在この部屋の関係性が崩れてきている。

その中でも、台所の床レベルの上昇、台所と内棟の動線の確保、台所の大庁への移動など台所の変化が顕著である。

また、新しい主体の登場のために、空間全体が一体化される動きもでてきている。たとえば、レストラン、事務所、ギャラリーなど、今まで住宅として使用されていた都市韓屋に新しい主体が入り込み、韓屋の形や特徴を生かしながら利用している例が増えている。その際、中の壁を取り除き、空間を一体化する動きが多く見られる。しかし、各壁を壊して空間を一体化しても、形自体がロ字型やロ字型をしているため、空間感があるのが特徴的である。また、マダンとの段差や間の窓などをなくし、マダンとの一体化を試みている例もみれた。

#### ■門間の活用

また門間の活用も良くみられる変化である。特に道路に面している韓屋の門間はお店などに使われることが

多い。また、住宅街では貸家などにも使われる。この門間を利用した設計事例も多くある。

### ■室内化マダン

そして一番多くみられる変化としてマダンの室内化がみられる。ㄱ字型やㄴ字型の都市韓屋は、マダンを真ん中に置いて、家を配置するため室内空間として使用される空間はそんなに大きくない。それとは相対的にマダン他は他の空間に比べて規模が大きくまとまった空間をもっている。そのうえ、マダンは多様な役割を持っており、中心的な場所である。動線もすべてマダンを通って行われるため、防寒と、まとまった空間の確保のためにマダンを室内化する傾向がみられる。

マダンの室内化には、マダンの要素をそのまま保ちながら可変的にマダンを開いたり閉じたりできるマダン、透明な材料で覆って光が入るアトリウムマダン、そして完全に室内化した室内化マダンなど多様な事例をみることができる。

また、この室内化マダンを利用して、設計事例に使われている例も少なくない。仁寺洞にあるレストラン「ヌリ」では、マダンに木の枠のアトリウムを作り、内部と外部の調和のとれた食事空間を作っている。

### ■韓屋の連結

一方、韓屋の密度を利用した事例もある。韓屋の連結である。密度が高く作られた韓屋たちは隣と密接してたてられており、連結して使われる例も多くある。また、行き止まりの道を韓屋を連結して、マダン同士をつなげることによって、韓屋の内部に路地を作っている例もみられる。このように韓屋の密度性と閉鎖性を利用したこれらの例は今後の韓屋の改修や、韓屋以外の設計方法としても利用できるのではないかと考えられる。

### ■今後の韓屋

現在ソウルでは、一方では韓屋の保存が行われ、一方では再開発によりどんどんつぶされ、今までの既存の敷地の形まで消滅するという二重の矛盾した開発が同時に行われている。しかし、現実はまだまた再開発の勢力が大きく、すごいスピードで今までの都市組織が壊されていっている。一方、都市韓屋の保存は、韓屋自体の価格を上昇させ、庶民には新しくたてられないという矛盾も起こっている。また、北村などでは、住民が出ていき、お金持ちの別荘になり、生活感がなくなったという声もある。そして保存といっても現在の生活に合わなくても今後の発展の可能性はない。現在までの都市韓屋のように、現在の生活に合わせつつ発展させる必要がある。よく、韓国では、朝鮮時代以来、独自の韓屋の文化と近代化の間がないと言われる。しかし、都市韓屋はこの再開発の波の中でも細々と変化しながら生き続けた。この小さいながらも変化の動向をみることによって、歴史からの流れをみることで

できる。よって、現在までの発展や変化を研究することによって、今後の韓屋の発展にも可能性が広がるのではないだろうか。

## 6. 結論

ソウルは自然条件を先行形態に発展した城郭都市であり、この都市形態は独特な都市住居である都市韓屋を産み出した。本研究により、この都市韓屋は、ㄱ字型の内棟を基本として建てられ、これらㄱ字型の内棟と路地を結ぶ役割として門間の役割が重要であるということがわかった。

また、この論文では、このようにして都市のなかに入り込んでいった都市韓屋が現在どのように使われており、変容してきたかをみた。

これらには様々な変化がみられ、その中の空間の一体化、門間棟の活用、室内化マダン、連結する韓屋などの変化について記述した。これらの変化は住民の暮らしの中の必要性から出てきたもので、これらを使って設計を行った例なども例示した。現在再開発により、韓国独特な都市形態がどんどん壊されていっている中、このような都市韓屋の変化などの調査が重要であり、これらの調査が今後の韓屋や韓屋以外の設計にも活用できるのでないかと思われる。

<sup>1</sup> ここでは韓国語での表現を使用する。それぞれの呼び方は、ㄴ字型（ティグツチャ型）、ㄱ字型（キョップチャ型）、ㄴ字型（ミュンチャ型）である。

<sup>2</sup> いつからこのような呼び名があるか明らかではなく、この地域を西村と呼ぶのを怪訝する声もあるが、本論文では、韓屋保存地域になっている北村（ブクチョン）と比較しやすい呼称のため、西村（ソチョン）と呼ぶことにする。

<sup>3</sup> ただし、ここでの対象地域は、ソウル城郭内にたてられた都市韓屋であり、郊外に一気に開発して作られた都市韓屋（普門洞や安岩洞など）は、この研究の対象外とする。

<sup>4</sup> 本研究はソウル市による「景福宮西側 第一種 地区単位計画の研究」に基づいて行った。この調査は、景福宮西側地域—西村（ソチョン）の地区単位計画を行うに当たって現況を、事前調査したものである。この調査は、筆者が所属している guga 都市建築設計事務所を中心に行った。

<sup>5</sup> 韓国の山城の形式は山の峰の途中に城郭を作る鉢巻式と、稜線に沿って城郭をつくり真ん中の溪谷や盆地を巡らせる包谷式、そしてその二つの基本方式を混ぜた複合式の三つがあるが、漢陽は包谷式の山城である。

<sup>6</sup> イ・サング「朝鮮の宮殿、都市と出会う：宮殿の前と後ろ」『ソウル学研究』33号、ソウル学研究所、2008/11

<sup>7</sup> イ・サングの「ソウル都心部筆地形態の比較（1912-2000）」と廃盤になった地籍図を 2002 年のオートキヤドの地籍図にあわせてつくったもの。

<sup>8</sup> 1770 年代漢陽都城図にも記載されている。

<sup>9</sup> 朝鮮第 21 代目の王である英祖（1694~1776）潜邸で有名な彰義宮の跡地には東洋殖拓株式会社の倉庫として開発された。

<sup>10</sup> 李完用や尹徳榮などの邸宅

<sup>11</sup> 大統領の住んでいる家のこと

<sup>12</sup> 東京大学修士論文朴仁圭の「中庭住宅の空間構成に関する考察—都市型韓屋の空間配置を中心に—」

<sup>13</sup> この関係性は、都市韓屋ができる以前からソウル地域において、大事な関係性であり、このㄱ字型の内房は、野村孝文「朝鮮の民家」では、都会型として、朱南哲「韓国の伝統的住居」でもソウル地方型として紹介されている。

### 質問 01

室内化マダンの環境の工夫について。光が入るマダンはまだしも、完全に室内化されているマダンの採光や通風などを確保するためにどのような工夫がされているのか？

マダン全体を室内化するのではなく、マダンの一部を残して、採光や通風に工夫しているものが多い。

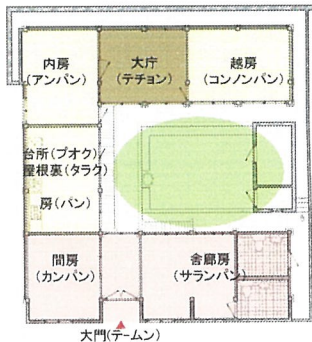


この例も、完全に室内化されている例の一つだが、元のマダンの一部を残し、そこに、大きな窓を設けることによって、採光と通風の工夫をしている。

### 質問 02

1920年代から都市型韓屋がたてられたときいたが、これら庶民住宅として提供する前の上流階級のプランがあるのか？

儒教が広まっていた韓国では、男性の空間と女性の空間が明確に分けられており、上流階級では、男性の空間を舎廊棟（サランチェ）と、女性と、家族中心である内棟（アンチェ）があった。サランチェでは主に、接客空間として使用されており、男性中心の空間として使用されていた。接客空間のため、様式なども内棟に比べ立派な形式を持っていた。一方アンチェは家族の空間であり、特に台所、アンパンは女性の空間であった。都市型住居はこのアンチェ部分の機能が残り、作られたと思われる。門間棟の一部にはサンチェを縮小したサランパンという部分があるが、現在では接客部分というより、お店や貸し屋、また部屋として使われていることが多い。



### 質問 03

これらの路地には車は通れるのか？

実測した路地のほとんどが、細くて車が通れない。1960年代以降に防災法により、消防車が通れるように、道路が格子状に作られたがそれ以前はほとんどが車が通れない路地であった。

### 質問 04

新しい道路によって、軒切りされたという路地を実測した例はあるか？

樓下洞 226 番地一帯の路地は、昔の路地が、大きな道路によって切り取られた例である。

下図がこの一帯の実測図であり、切り取られた立面は写真のように切り取られたため、変わった立面を持っている。

